

康熙奉
Kang Hibong

「関ヶ原」の勝敗はなぜ
決まつたのか
「文禄・慶長の役」で

復讐と裏切りの
「関ヶ原」は
「文禄・慶長の役」
が引き金になった!

出兵せずに恩恵だけ受けた徳川家康
出兵時に多くの恨みを買った石田三成
両者の決定的な違いが「関ヶ原」を左右した

今まで
書かれてなかった
真実が
ここにある!

「関ヶ原」の勝敗はなぜ「文禄・慶長の役」で決まったのか

康熙奉

星海社

375



復讐と裏切りの「関ヶ原」は

「文禄・慶長の役」が引き金になつた

東海道本線に乗つて岐阜駅から米原駅まで行くとき、楽しみの一つが関ヶ原駅を通過するこ
とである。

大垣駅を過ぎるとなぜかソワソワしてくるのだが、連なつた山が迫つてくると、その眼
前に関ヶ原の風景が見え始める。心が高揚する瞬間だ。

日本のほぼ中央で、天下の雌雄を決する史上最大の決戦が行われた……そうした歴史の
重みをひしひしと感じられる場所が、私にとつては関ヶ原なのである。

時間があるときは関ヶ原駅でグラリと降りてみる。どんなに家並みが変わったとしても、
山の形だけは1600年9月15日とまったく変わっていない。時間を超えた風景の佇まい

に、なんとも嬉しくなつてくる。

そんな気持ちで歩いていると、自然と向かう先は篠尾山のふもとだ。ここに、西軍を率いた石田三成が陣を置いた。実際に目の前に広がる景観が圧巻だ。左右に伸びる関ヶ原とまわりの山並みを一望できる。

「なんと最良の場所に陣を置いたことか」

素直にそう思える。

しかも、西軍の諸大名は東軍を囮むように布陣していた。

対峙する形だけを見ると、西軍の圧勝であつたかもしない。それでも、物事は机上どおりには進まない。

戦国時代の合戦は、人間を動かす掌握術がモノを言った。その点で、石田三成は人の気持ちを動かせなかつたし、徳川家康は巧みに味方を引き入れる心理戦で一枚も二枚も上手であつた。

それにしても、関ヶ原合戦というのは不思議な戦いだつた。なぜなら、不俱戴天の敵同志が戦つたのではなく、豊臣恩顧の大名たちが東軍と西軍に分かれて争つたからだ。

東軍は徳川家康が総大将とはいえ、配下の多くは豊臣家に恩がある大名たちである。い

わば、徳川家康は豊臣家ゆかりの大名たちの力を借りて天下取りに動いている。彼の人間洞察を生かした戦術がそれを可能にしたのだが、哀れなのは利用された大名たちだ。豊臣秀吉亡き後、幼い秀頼を守つて豊臣家に忠誠を誓つたはずなのに、徳川家康が仕掛けた工作によつて石田三成こそが悪の政敵だと錯覚させられ、結果的に豊臣家そのものを滅ぼすことにつながつてしまつた。

しかも、東軍にくみした豊臣家ゆかりの大名たちは「用済み」とばかりに、その後何人も取り潰しの憂き目にあつてている。

つまり、こういうことだ。豊臣家に多大な恩義を感じていながら、結局はその豊臣家に弓を引くことになり、なおかつ自分たちもやがて滅ぼされてしまう……考えれば考えるほど自虐的であつた、と言わざるを得ない。

このように、関ヶ原合戦は豊臣家の内紛の果てに起きた



石田三成が陣を構えた 笹尾山から見た関ヶ原の風景

戦いなのだが、その内紛の萌芽は、すでに文禄・慶長の役のときに生じていた。

言うまでもなく、文禄・慶長の役は大義もなく、諸大名にとつて避けたかった戦いであった。しかも、西国の大名ばかりが動員されて、^と_{たん}塗炭の苦しみを味わった。それなのに、恩賞はほとんどなかつた。

戦国の世もまだ完全に終わつていない時代に、徒労に終わつた戦いでは不満が渦巻くのも当然のことである。

そのはけ口が石田三成への復讐だつた。彼は能吏として文禄・慶長の役の実務を仕切つたのだが、朝鮮半島で実際に戦つた大名たちからは極端に憎悪された。根深い怨みを晴らす復讐の場が関ヶ原であり、そこでは裏切りが横行した。

つまり、関ヶ原合戦の勝敗には、文禄・慶長の役で起つた豊臣家臣団の内紛が決定的に影響していた。

歴史は、人間の感情が引き起こす因果応報で成り立つてゐる。文禄・慶長の役から関ヶ原合戦に至る9年間は、その因果応報の象徴的な時代であつた。時系列に沿つて改めて振り返ることで、復讐と裏切りが勝敗を決定づけた背景が見えてくるに違ひない。

目 次

はじめに 復讐と裏切りの「関ヶ原」は「文禄・慶長の役」が引き金になつた 3

序 章 文禄の役は奇襲作戦から始まつた

13

- 1 釜山に上陸した豊臣軍 14
- 2 反撃できない朝鮮王朝軍 17
- 3 怒濤のような快進撃 19
- 4 都からの撤退論議 23
- 5 北に向けて脱出した国王 27
- 6 朝鮮王朝軍はなぜ弱かつたのか 32

第一章 豊臣軍の怒濤の進撃はどこまで続いたのか

35

1 板挟みになつた対馬	36
2 来日した使節	39
3 待ち続けた返書	43
4 対立した正使と副使	47
5 豊臣軍の戦術	51
6 民衆の怒りが頂点に達した	56
7 李舜臣の天才的な海戦術	59
8 変わりゆく戦局	64

第2章 偽りの和平交渉は果たして成立したのか

67

1 明軍の敗退	68
---------	----

第3章

2	平壌からの退	71
3	碧蹄館と幸州山城の戦い	
4	豊臣軍に有利な和議交渉	
5	名護屋城での工作	85
6	和平が難しくなった	90
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		
43		
44		
45		
46		
47		
48		
49		
50		
51		
52		
53		
54		
55		
56		
57		
58		
59		
60		
61		
62		
63		
64		
65		
66		
67		
68		
69		
70		
71		
72		
73		
74		
75		
76		
77		
78		
79		
80		
81		
82		
83		
84		
85		
86		
87		
88		
89		
90		
91		
92		
93		
94		
95		
96		
97		
98		
99		
100		
101		
102		
103		
104		
105		
106		
107		
108		
109		
110		
111		
112		
113		
114		
115		
116		
117		
118		
119		
120		
121		
122		
123		
124		
125		
126		
127		
128		
129		
130		
131		
132		
133		
134		
135		
136		
137		
138		
139		
140		
141		
142		
143		
144		
145		
146		
147		
148		
149		
150		
151		
152		
153		
154		
155		
156		
157		
158		
159		
160		
161		
162		
163		
164		
165		
166		
167		
168		
169		
170		
171		
172		
173		
174		
175		
176		
177		
178		
179		
180		
181		
182		
183		
184		
185		
186		
187		
188		
189		
190		
191		
192		
193		
194		
195		
196		
197		
198		
199		
200		
201		
202		
203		
204		
205		
206		
207		
208		
209		
210		
211		
212		
213		
214		
215		
216		
217		
218		
219		
220		
221		
222		
223		
224		
225		
226		
227		
228		
229		
230		
231		
232		
233		
234		
235		
236		
237		
238		
239		
240		
241		
242		
243		
244		
245		
246		
247		
248		
249		
250		
251		
252		
253		
254		
255		
256		
257		
258		
259		
260		
261		
262		
263		
264		
265		
266		
267		
268		
269		
270		
271		
272		
273		
274		
275		
276		
277		
278		
279		
280		
281		
282		
283		
284		
285		
286		
287		
288		
289		
290		
291		
292		
293		
294		
295		
296		
297		
298		
299		
300		
301		
302		
303		
304		
305		
306		
307		
308		
309		
310		
311		
312		
313		
314		
315		
316		
317		
318		
319		
320		
321		
322		
323		
324		
325		
326		
327		
328		
329		
330		
331		
332		
333		
334		
335		
336		
337		
338		
339		
340		
341		
342		
343		
344		
345		
346		
347		
348		
349		
350		
351		
352		
353		
354		
355		
356		
357		
358		
359		
360		
361		
362		
363		
364		
365		
366		
367		
368		
369		
370		
371		
372		
373		
374		
375		
376		
377		
378		
379		
380		
381		
382		
383		
384		
385		
386		
387		
388		
389		
390		
391		
392		
393		
394		
395		
396		
397		
398		
399		
400		
401		
402		
403		
404		
405		
406		
407		
408		
409		
410		
411		
412		
413		
414		
415		
416		
417		
418		
419		
420		
421		
422		
423		
424		
425		
426		
427		
428		
429		
430		
431		
432		
433		
434		
435		
436		
437		
438		
439		
440		
441		
442		
443		
444		
445		
446		
447		
448		
449		
450		
451		
452		
453		
454		
455		
456		
457		
458		
459		
460		
461		
462		
463		
464		
465		
466		
467		
468		
469		
470		
471		
472		
473		
474		
475		
476		
477		
478		
479		
480		
481		
482		
483		
484		
485		
486		
487		
488		
489		
490		
491		
492		
493		
494		
495		
496		
497		
498		
499		
500		

再戦となつた慶長の役は何をもたらしたのか

豊臣家臣団の分裂は何を引き起こしたか

115

- 1 諸大名の告発 116
2 石田三成と加藤清正の対立構造 119

- 3 激しい反目の行方 123

- 4 大名たちの分裂は必至 126

- 5 徳川家康に救われた石田三成 130

- 6 ついに石田三成が拳兵 133

復讐を果たす「天下分け目の決戦」

139

- 1 東軍が小山から引き返す
2 宇喜多秀家と小早川秀秋
3 黒田如水という曲者 148 142 140

- 4 いざ関ヶ原へ向かう 153
- 5 激しい戦闘が始まった 158
- 6 敗軍の将 162
- 7 亂世の生き方 165
- 8 藤堂高虎の積年の怨嗟 168
- 9 関ヶ原の「その後」 171
- 読む年表「1590～1600」 文禄・慶長の役の動向と関ヶ原合戦までの全体がつかめる 177
- 戦国期の主な大名 文禄・慶長の役の動向と関ヶ原合戦時の兵力 194
- おわりに 苦難にさらされた人々はどう生きたのか 196

写真／康熙奉

図版／ジエオ

豊臣軍の怒濤の進撃はどこまで続いたのか

1 板挟みになつた対馬

儒教的な価値観

1590年（天正18年）の日本列島と朝鮮半島。

国が成り立ちには、どのような違いがあつたのか。

日本は長く続いた戦乱が終わり、豊臣秀吉が天下を統一した。それを可能にしたのが、武による力の統治だった。「下克上」という言葉が象徴するように、上下の秩序は崩壊し、力を持つ者が正義を主張できた。

その頂点に君臨したのが豊臣秀吉であつた。彼には、東アジアの秩序という概念はなかった。室町時代の前期には、日本と朝鮮王朝の間では使節の交換が行われ、対等な立場での善隣関係を築いていたのだが……。

1392年に建国された朝鮮王朝は、中国大陸の霸者たる明の意向に沿う形で朝鮮半島を統治し、200年にわたつて太平の世を築いていた。

統治の根本思想は儒教。とりわけ、朱子学という朱熹（1130～1200年）が体系化させた観念論的な儒教に基づく徳治主義が朝鮮王朝の国是となっていた。そして、国王を頂点とする中央集権体制が、国土の隅々まで儒教的な価値観を浸透させていた。

その一方で……。

豊臣秀吉は1585年に関白に就任した直後から、大陸に打つて出る構想を持ち始めていた。彼は1587年に九州を平定したが、そのときには中国だけでなくインドまで手中に収めると大言壮語するようになっていた。

低い身分から1590年に天下人になった豊臣秀吉は、自身を「太陽の子」と称するに至った。日本の歴史上で、当時の豊臣秀吉ほど絶対的な権力を握った人物は他にいなかつたかもしれない。それでも、彼は自分の強さと弱さを知っていた。

強さは、国内で自分に逆らえる者がいないこと。

弱さは、大名たちの従順さが知行の安堵で成り立っていること。

成り上がり者の豊臣秀吉には、徳川家康の家臣団のような譜代の忠臣者が少なかつた。それゆえ、豊臣秀吉は長く大名たちを従わせるためには、褒美としての領土が不可欠だと痛感していた。しかし、国内にはもはや分け与える領土が残っていない。

それならば……。

すぐとなりの朝鮮半島に目をつけた、という次第ではないのか。

対馬の苦悩

漢文さえ読めない豊臣秀吉に、朝鮮王朝の朱子学に基づく徳治政治が理解できるはずもない。板挟みになつたのが対馬である。

歴史的に餓死者を多く出してきたこの島は、かつては倭寇の根拠地になつてしまつた。その被害に困り果てた朝鮮王朝は、兵を送つて対馬に攻め込んだことがあつた。それは1419年のことで「応永の外寇」と呼ばれる。

以後、朝鮮王朝は対馬を懐柔する策に出て、農地を持たないこの島のために米を送つたり、日本との貿易の特権を与えたりしてきた。いわば、日朝貿易こそが対馬の命綱だつた。

しかし、1587年に九州を平定した豊臣秀吉は、無理難題を言つてきた。
「かの国から人質を取れ」

「国王を挨拶に来させよ」

対馬を仕切つていた宗義調そうよししげは、朝鮮王朝の国情をよく知つてゐる。

中国大陸の明に対しては、崇め奉るがごとく儀礼を守る朝鮮王朝も、日本に対しては同格であるという意識に凝り固まっている。日本が少しでも格上であるという態度を示せば、火が出るような反感を持つのは自明の理だ。

2 来日した使節

朝鮮王朝に送った使者

豊臣秀吉の要求に宗義調は困り果てていた。しかし、天下人には逆らえない。対馬としては、「豊臣秀吉の怒りを買わず、朝鮮王朝が容認してくれる」という方法を考えなくてはならなかつた。

それが、使節の派遣だつた。朝鮮王朝国王の命を受けた使節が日本にやつてきて、天下統一の祝賀が記された国書を豊臣秀吉に渡す……これが、考えうる最良の方法と思えた。宗義調が使者として朝鮮王朝に送ったのが、柚谷康広という家臣だつた。柚谷家は、朝

鮮王朝との通商に尽力してきた家柄である。

ただし、この人選は誤った。柚谷康広は朝鮮半島で傲慢な言動が多かつたからである。彼は釜山から都の漢陽に向かう道中、儀仗の兵たちが持つ槍が短いことを嘲笑し、「お前たちの槍はなぜそんなに短いのだ」と言った。

戦国時代の戦場をくぐり抜けてきた柚谷康広から見れば、朝鮮王朝の槍はお飾りにすぎないと思えたようだ。

さらなる道中で、柚谷康広は地方の高官の接待を受けた。宴席では妓生^{ギセン}が場を華やかに彩つている。高官の白髪を見ながら、皮肉をこめて柚谷康広は言つた。

「私は長い戦陣で苦労して髪も髭も白くなりました。あなたは妓生と遊びながら何の憂いもなく過ごされたようですが、それでも白髪なのはどういうわけですか」

さぞかし、場が白けたことだろう。

柚谷康広が漢陽に到着したとき、外交も担当する大臣の礼曹判書^{イエジヨバン}が歓迎の宴席を用意した。酔つた柚谷康広は、わざと宴席に、当時はとても貴重だった胡椒をばらまいた。すると、妓生と樂師が競つて胡椒を拾い始めて、その場が大騒ぎになつた。

その様子にあきれかえつた柚谷康広は、宿に戻つてから通訳に言つた。

「お前の国は滅びるよ。人心がたるみきつていてる」

柚谷康広は、使節としてふさわしくないほど傲慢な男だった。しかし、彼が見たのは、当時の朝鮮王朝のありのままの姿だ。

戦国時代が終わつたばかりの日本から見れば、朝鮮王朝の人々はぬるま湯にどっぷりつかつていると思えたことだろう。

長く待たされた使節

柚谷康広は朝鮮王朝から好ましい返事をもらうことはできなかつたが、新たに対馬島主となつた宗義智はその後何度も朝鮮王朝に使節の派遣を願い出た。彼だけでなく、貿易に携わる人たちも、日朝関係の悪化を防ぐために尽力した。

朝鮮王朝もようやく重い腰を上げた。使節の派遣は、日本の内情を知るうえでも効果的だつた。その使節が京に到着したのは、1590年7月下旬である。

あいにく豊臣秀吉は不在だつた。小田原を攻めるために遠征していたからだ。小田原の北条氏が豊臣秀吉に降伏したのは7月5日だつたが、彼はすぐに京に戻らず、そのまま諸大名に睨みをきかせた。従わない者もはや天下にいないことを確認したうえで、豊臣秀

吉はようやく9月になつて京に戻つてきた。

朝鮮王朝から派遣された使節の正使は黄允吉ファン・ユンギルで、副使は金誠一キム・ソンイだった。

「あまりに待たされたが、ようやく豊臣秀吉に会える」

黄允吉は胸をなでおろしたが、それは甘かつた。豊臣秀吉はまだ朝鮮王朝の使節に会う気がなく、相手をじらし続けた。よほど下に見ていたのだろう。

豊臣秀吉がようやく使節と会見したのは11月7日だつた。場所は聚楽第。贅を尽くした建物は完成して間がなかつた。使節が見た豊臣秀吉は、小柄で顔色が黒く、人を射るような眼光だつた。

黄允吉は豊臣秀吉に国書を渡した。

「統一を祝賀いたします」

そう書かれた国書を受け取つた豊臣秀吉は、相手を見下した表情を変えなかつた。そればかりではない。朝鮮王朝の使節をまるで無視するかのように、彼は我が子の鶴松を抱き続けていた。

鶴松は、淀殿よどどのが産んだ豊臣秀吉の長男で、このとき2歳だつた。まだ言葉も満足に話せない。そんな幼子が豊臣秀吉に抱かれている間に小便を漏らした。溺愛していると、服が

小便で濡れても可愛いのか、豊臣秀吉は笑いながら侍者を呼びつけて、鶴松を渡した。

その姿を、黄允吉と金誠一は苦々しく見ていた。

「豊臣秀吉は傍若無人」

この一言が、朝鮮王朝側の使節が抱いた印象だ。

3 待ち続けた返書

軽んじられた人命

冷遇は接待の中身にもよく出ていた。料理は、外国からの賓客をもてなすものとは言えなかつた。極めつけは、国書を出さなかつたことだ。使節が帰国の段になつても、豊臣秀吉から返書が来なかつた。

副使の金誠一は憤慨した。

「我々は王命で使臣となつてゐる。返書がなければ、王命が捨てられたも同然である」

金誠一の立場なら、怒りはもつともだ。

儒教的な価値観が統治の根本になつてゐる朝鮮王朝では、先例どおりの儀礼を守ることが不可欠になつてゐる。ましてや、外国に使節として派遣されるほどの高官であれば、外交儀礼に忠実でなければ国に戻れない。金誠一が執拗に返書にこだわったのは、自らの立場をわきまえれば当然であつた。

金誠一がいかに使節として自尊心の強い男であつたか。それを物語るのが、京に向かう途上の対馬にいたときの話だ。対馬の島主であつた宗義智が使節一行を寺で饗應した。このとき、黄允吉と金誠一も先に座についていたが、あとから宗義智が現れたとき、彼はかごに乗つたまま門をくぐり、使節たちのすぐそばでかごを降りた。

これを咎めたのが金誠一だつた。

「対馬は我が国の藩臣ではないか。我々が王命を賜つて参つたというのに、このように侮辱するとはなにごとか。こんな宴席など受けるわけにはいかない」

金誠一はそう憤つて、座を去つてしまつた。あわてたのが宗義智である。この男がやることも極端だ。宗義智はかごをかついていた人を殺し、その首を金誠一の前に差し出して謝罪した。

この一件をもつて、対馬の立場もわかる。対馬では餓死しないためには、朝鮮半島との交易で利益をあげなければならなかつた。その権利を守るためには、朝鮮王朝側に卑屈にならざるをえない。

とはいゝ、何の罪もない人を殺すとは……。これで、金誠一は機嫌を直したのか。儒教的な格式を守るために、あまりに人命が軽んじられてしまつた。

疑心暗鬼になつた使節

豊臣秀吉からの返書にこだわる金誠一。しかし、正使の黄允吉は別の切迫した事情を抱えていた。彼は、抑留されることを恐れたのだ。

「豊臣秀吉は正気ではない。我が国に攻め込むつもりであろう。そうであるならば、我々はつかまつて殺されるかもしれない」

使節の正使がここまで疑心暗鬼になつてゐる。返書を受け取らずとも一刻も早く帰国したいといゝ強迫観念が黄允吉をあせらせた。

とりあえず、使節一行は帰国の途に着き、堺まで來た。そこに、豊臣秀吉からの返書が届いた。文面を読んだ黄允吉は愕然とした。

金誠一は怒りで声を震わせた。

「ただちに明国に乗りこみたい。貴国は先鋒を務めよ」

このように受け取れる文面だった。金誠一は執拗に返書の書き換えを要求した。

黄允吉は別の考えを持つていた。

「これほど礼儀に反した返書はないが、むしろそのまま持ちかえったほうが、豊臣秀吉のことを国人々に知らせることができるので……」

黄允吉にとつては、もはや儒教的な外交儀礼は重要ではなかつた。じかに見た豊臣秀吉の敵意をありのままに国王や政権幹部に伝える必要があつた。

実際、黄允吉は1591年1月に釜山に戻ると、早馬を送つて「秀吉が攻めてくる」とを漢陽に知らせた。

『朝鮮王朝実録』1591年3月1日の記述によると、実際に使節が帰国報告をしたとき、14代王・宣祖は单刀直入に尋ねてきた。

「倭は攻めてくるや否や」

返答の中身は、使節の間で分かれた。黄允吉は自信を込めて上奏した。

「乱が起きましよう。備えが必要です」

御前会議の場に緊張が走った。宣祖の表情も険しい。

4 対立した正使と副使

朝鮮王朝の病巣

黄允吉の次に上奏した金誠一。彼はなんと言ったのか。

「かの国が乱を起こす気配はありません」

きつぱりとそう言つた。さらに、金誠一は続けた。

「正使があのよう申されて、人心を惑わすのはよくありません」

金誠一は、立場が上に当たる黄允吉を厳しく批判した。

真っ向から意見が対立した正使と副使。立場から言えば、格上の正使の意見が通るのが道理だ。しかし、その場で奇妙なことが起こつた。なんと、副使である金誠一の意見が正式に採用されたのだ。

つまり、豊臣秀吉は攻めてこない、と……。
なぜ逆転現象が起きたのか。

当時、朝鮮王朝の政権内は東人派と西人派という二大派閥に分裂し、激しく対立していた。ただし、優勢なのは金誠一が所属していた東人派のほうだった。一方の黄允吉は西人派。派閥の力学で、金誠一の意見が勝ったのだ。

党争（政権内部の派閥闘争）は、朝鮮王朝の病巣と言われたが、こんな重大な場面でも弊害が現れたのである。

「豊臣秀吉は攻めてこない」という副使の意見が採用されたために、国防の強化は見送られた。ことなれ主義の最たるものかもしれない。

確かに、「攻めてこない」と思っているほうが心おだやかにいられる。当時の朝鮮王朝は外敵に対して迂闊^{うかつ}すぎた。ずっと太平の世が続いていて、国を守るべき高官たちも緩みきつっていた。ここが、乱世が続いた日本との決定的な違いだつた。

徳川家康の事情

2つの死が豊臣秀吉の心を惑わせた。

1つ目は、もつとも信頼していた弟の豊臣秀長の死だつた。それは、1591年1月22日のこと。もともと豊臣秀長は朝鮮半島に兵を送ることに反対だつた。彼が生きていれば、豊臣秀吉を翻意させることができたかもしれないのだが……。

2つ目は、1591年8月5日の鶴松の死だつた。わずか3歳。豊臣秀吉の悲しみはあまりにも深かつた。鶴松を失つたからには、自分の後を託せる人物を早急に決めなければならなかつた。

選ばれたのは、甥の豊臣秀次だつた。豊臣秀吉は彼を後継者に決めて養子にした。豊臣秀次はもともと従三位権中納言の官位だつたが、わずか1カ月で関白に昇進。豊臣秀吉自身は太閤と呼ばれるようになつた。これは「前関白」の称号である。豊臣秀次が関白になつたといつても、絶大な実権を握つていたのは豊臣秀吉だ。彼は鶴松の死の衝撃から立ち直る契機を欲していた。

あまりに悲惨な戦乱も、こんなにもごく個人的な事情から歯止めがまつたくからくなつていつた。そんな豊臣秀吉だつたが、ただ1人、この男の意向を無視するわけにはいかなかつた。

徳川家康である。

豊臣政権の五大老の筆頭。というより、豊臣秀吉にとつて唯一、自分が取つた天下をひっくり返す恐れを持った男だった。もちろん、徳川家康の面従腹背に気づかない豊臣秀吉ではなかつただろう。

1591年3月9日、豊臣秀吉は重臣たちを集めて、大陸侵攻の是非を問うた。

徳川家康は反対しなかつた。他の大名と同じ立場を取つたのだ。それもそのはず、彼は豊臣秀吉から「賛成してくれれば、貴殿には負担は掛けないようにする」という内々の言葉をもらつていたのである。

徳川家康は、ほくそ笑んだに違ひない。朝鮮半島に送られる豊臣恩顧の大名は疲弊し、政権は弱体化する。そこに、徳川家康が付け入る隙が生まれる。

磐石の豊臣政権。ほころびが出るとすれば、それは大陸侵攻がもたらす混迷から始まる。天下人になることをあきらめていない徳川家康が、反対するわけがない。

「自分の兵は1人といえども海を渡らせない」

それが徳川家康の次なる戦略だった。

5 豊臣軍の戦術

20日で都を占領

もはや後戻りできない。

豊臣秀吉の頭に宿った妄想は、矢継ぎ早に現実化していった。

出兵の根拠地になつたのは九州北端の東松浦半島だつた。朝鮮半島に一番近いことは確かだが、地の利は決していいとはいえないなかつた。場所が不便すぎるのだ。しかし、東松浦半島の突端に名護屋城を造ることが決まり、工事は1591年10月10日に始まつた。

凄まじい突貫工事であつた。加藤清正、黒田長政、小西行長らが中心になつて築城を進め、1592年2月、城郭が周囲6キロの名護屋城が一応の完成をみた。

130もの諸将の陣営が城を囲み、城下の港には500艘の軍船が集結した。送られる兵は15万人。1年前まで何もなかつた場所に、巨大な前線基地が出現した。

「本当に海を越えるのか」

兵の誰もがまだ半信半疑だった。大名も同様だ。ただ1人、豊臣秀吉だけが、正気を失つたまま、不退転の号令を発した。

こうして始まつた文禄の役。豊臣軍は釜山に上陸してから怒濤の勢いで勝ち進み、わずか20日で都の漢陽を占領した。

序盤での大勝に気を良くした豊臣秀吉。自ら朝鮮半島に渡る意欲を見せたのだが、徳川家康や前田利家といった大老たちの反対によつてしばらく延期した。その豊臣秀吉に代わつて石田三成たちが朝鮮半島に渡り、奉行として実質的に各大名に命令を出した。

配下となつた大名たちは兵糧米をしつかり確保するために、土地を占領して農民を支配することを狙つた。

捕虜となつた王子

第1軍の小西行長は、平壤に向かつた宣祖を追つて、北上を続けた。行く手を阻むのは、統制が乱れた朝鮮王朝軍というより、大河の数々だつた。急流の川が多い日本の地形と比べて、朝鮮半島には川幅が広い大河が多かつた。イムジンガン臨津江もその1つ。小西行長軍はここも果敢に突破して平壤をめざした。

第2軍の加藤清正軍は、朝鮮半島東北部の咸鏡道^{ハムギヨンド}に向かつた。ここは辺境の地。北方の異民族の侵入も多い。その地にまで兵を繰り出すことで、豊臣秀吉の目的が朝鮮半島全土の占領であることが明白になつた。

咸鏡道をさらに進んだ加藤清正。「賊将の中で一番勇敢で、戦闘に長けていた」と朝鮮王朝で評された彼は、北辺の要地であつた会寧^{フエニョン}にいた王子2人を捕虜にした。

その2人とは、宣祖の息子である臨海君^{イメグン}と順和君^{スアグン}である。

なぜ、王子までが辺境の地にいたのか。実は、2人は義兵を募る目的を持って地方を巡回していたのである。そこまで朝鮮王朝は追い詰められていた。

なお、臨海君と順和君は、宣祖の側室が産んだ王子たちであつた。

一夫一婦制の朝鮮王朝では国王といえども妻は1人だけだったが、側室はかなり多かつた。宣祖の場合、正室の懿仁王后^{ウイイイン}には子供がいなかつたが、7人の側室が13人の王子と10人の王女を産んでいた（1592年当時）。その中で、宣祖の長男が臨海君であり、彼は正統的な王位継承者になれる王子だった。

しかし、戦乱が臨海君の立場を極端に悪くした。彼は加藤清正軍の捕虜になつたことで屈辱にまみれ、解放された後には精神的に乱れ、酒に溺れて奇行が目立つようになつてしまつた。

まつた。もともと能力的にも周囲からの評価が低かった。

代わりに、王位継承者として信頼を獲得していったのが、二男の光海君クアンヘグンだつた。彼は頭脳明晰で、戦乱の最中にも戦功を挙げている。

こうした高い評価が積み重なつていき、二男でありながら光海君が世子セジヤ（国王の正式な後継者）に選ばれている。このように、豊臣軍との戦争は、朝鮮王朝の王位継承問題にも大きな影響を及ぼしたのだ。

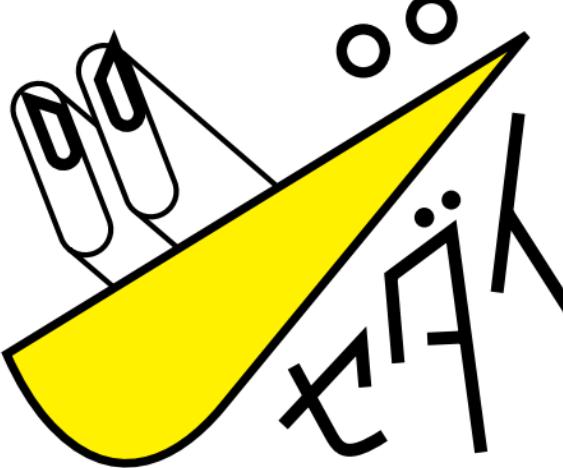
後の話であるが、1608年に宣祖が世を去つて光海君が15代王として即位したとき、彼は翌年兄の臨海君の命を奪つている。不満が多い臨海君の政府批判が直接的な理由。とはいって、王位継承をめぐる王子同士の骨肉の争いは朝鮮王朝でも前例があり、常に悲劇が繰り返される危険性を朝廷が抱えていた。

小西行長軍と加藤清正軍の進路

—— 小西行長軍

----- 加藤清正軍





君は、 何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ
ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!